自分の意思を完璧に表現できる喜び。夢を持って生きる勇気、それを実現する力。みんな「ボッチャ」が教えてくれました。

年齢や性別、障害の有無に関係なく誰もが楽しめるスポーツである「ボッチャ」。加藤啓太さんは重度の脳性麻痺を持ちながら、ボッチャ選手として活躍を続けています。その一方で、大学入学や一人暮らしなどの夢を次々とかなえ、大学卒業後には障害者のためのＮＰＯ法人を設立しました。そんな加藤さんに、ボッチャが拓いた人生、そしてこれからのさらなる夢について伺いました。

ボッチャ選手
ＮＰＯ法人ホットスペース理事長
加藤啓太さん

ボッチャとの出合い

ボッチャとの出合いは中学2年生のとき。友だちのお母さんに勧められたことがきっかけでした。

僕は身体障害1級で、食事、話すこと、寝返りをうつことなど、日常生活全般に介助を必要とします。だから学校では、体育の時間だけは「ただそこにいるだけ」の存在でした。そんな自分にも取り組めるスポーツがあることを知って、興味をひかれましたね。最初は遊び感覚でみんなとわいわいゲームをするだけで楽しかったのですが、次第に試合で自分の力を試してみたいと思うようになりました。

ボッチャは、重度脳性麻痺者や四肢重度機能障害者のために考案された競技で、カーリングに似たスポーツです。先攻がコートに投げ入れたジャックボール（目標球）と呼ばれる白い球めがけて、両チームがそれぞれ6球ずつのカラーボールを転がし、いかにジャックボールに近づけるかを競うゲームです。

障害のために手でボールを投げられなくても、「ランプ」と呼ばれる滑り台のような補助器具を使い、自分の意思を競技アシスタント（介助者）に伝えて参加することができます。僕も、競技アシスタントにランプの方向や角度を指示してプレーしています。その指示は、プレーヤーである僕にしかできません。「こんな攻めは啓太にしかできないね！」と言われたときの気分は最高です。生きていることを実感できる瞬間ですね。

ボッチャを通して、僕は障害の有無にかかわらず自分の意思を100％表現することができる喜び、夢を持って生きていく勇気をもらいました。ボッチャは、僕の人生のなかで欠かすことのできない存在です。

自分より遥かに重度の障害を持つ日本のエースに憧れて

高校1年生のときに、日本ボッチャ選手権大会に出場しました。成績は予選落ちだったにもかかわらず、日本ボッチャ協会・理事長の古賀稔啓先生が「君、香港に行ってみない？　19歳以下のアジア大会があるんだよ」と声をかけてくださいました。「実績もない僕になぜ？」と不思議がると、「3年後、5年後に日本の中心選手になってくれればいいから」とおっしゃるのです。突然のことで驚きましたけど、嬉しかったですね。スポーツで世界の舞台に立てるなんて考えてもみませんでしたから。

はじめて臨んだ国際大会の僕の結果は全敗でした。でもチームメイト3人は、メダルを取って帰りました。このとき、「腕を磨いて、実績と実力で正真正銘の日本代表メンバーになろう」と心に決めたんです。

その後さまざまな大会に出場するなかで、僕より5つ年上で遥かに重度の障害を持つ選手が日本のエースとして世界で活躍し、パラリンピックを目指していることを知りました。競技アシスタントとの息がぴったり合った素晴らしいプレーに憧れましたね。しかも彼は親元を離れて一人暮らしをしているというではありませんか。当時の僕には雲の上の存在に思えました。さすがパラリンピックを目指す人は意志の強さが違う、自立していろんなことにチャレンジしている。僕も彼のようなアスリートになろうと自らに誓ったんです。パラリンピックへの出場もそのころから意識するようになりました。

勇気や希望を与えられるビッグゲームをしてきます！

ロンドンパラリンピックのボッチャ日本代表選手に内定したという知らせを受けたのは3月20日のことです。「夢がかなった！」と嬉し涙がこぼれました。競技アシスタントを務める橋本健太さんも「鳥肌が立った」というほど喜んでくれました。

僕が出場するのは、最も障害が重い選手が競う「BC3」の個人戦です。このクラスで日本人が出場するのははじめてのことです。これまでお世話になったたくさんの人たち、東日本大震災の被災者の方々をはじめ日本の皆さんに、勇気や希望を与えられるビッグゲームをしてきます。

目標は「メダル」です。ボッチャは作戦によっては1球で大逆転を狙える競技

ですから、最後まで可能性はゼロではありません。「1％の可能性があるのなら、最後まであきらめない。全力を尽くせ！」が僕のモットー。難しいとは思いますが、出場する限りメダル獲得にこだわりたいですね。

今、僕がここにあるのは両親のおかげです

僕が脳性麻痺になったのは、生後3か月のとき。原因不明の窒息状態に陥り、医師からは助からないと告げられたものの奇跡的に一命をとりとめたのだそうです。しかし、全身に麻痺が残り、僕の体はまるで洗濯板のようにガチガチにこわばってしまったといいます。

両親は僕の体が少しでも良くなる手立てを必死に探し、ドーマン法というリハビリにたどり着きました。ドーマン法は時間もお金もかかる訓練で、費用は毎年高級車を買えるほどかかるともいわれます。歩けるようにはなりませんでしたが、こうして両手が動き、電動車椅子に乗って生活できるのは、長い間両親が力を尽くしてくれたからです。

テルミーも父親にかけてもらっているんですよ。父は、ドーマン法のリハビリで大変お世話になったボランティアの方を通じてテルミーと9年前に出合い、今ではテルミーの療術資格者として名古屋で療術所を開いています。ボッチャの試合がある朝は、父に全身テルミーをかけてもらい、体をほぐしています。テルミーをかけてもらうと体の緊張やこわばりがやわらぎますし、体調管理にも役立ちます。

2006年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた世界選手権のときも、テルミーに助けられました。試合前に39度の高熱を出してしまったのですが、ドーピング検査があるので解熱剤や風邪薬を飲むことができません。なんとか僕の熱を下げようと、父は30分おきに10時間にもわたって下半身にテルミーをかけてくれました。それでようやく熱が下がって試合に出ることができました。遠征先でぎっくり腰になった他の選手の競技アシスタントにも父のテルミーは役立ったようです。その方は、おかげで試合に連日出場することができたと喜んでいました。

両親をはじめ家族の献身的なサポートがなければ、僕はきっと今、ここにいません。人はみんな、いろんな人に助けられながら生きているのだけれど、やはり両親への感謝の気持ちは特別ですね。

「夢物語」と言われた大学受験に挑戦して

僕は中学のころから大学に行きたいという強い願望を抱いていました。その気持ちを両親や先生に伝えたとき、賛成の声は一つもありませんでした。周りからは「大学受験向けの勉強もしていないのに進学なんて絶対無理。夢物語だ」と言われ続けました。だったら自分に合った受験方法を探そう、と思いました。ボッチャの試合でもそうですが、頑固で負けず嫌いな僕は追い込まれると逆に燃えるんです（笑）。

インターネットや大学案内で探した結果、自分を最大限にアピールできるAO入試（面接、小論文などにより多面的な評価を行い、合格者を選抜する制度）を見つけました。

ちょうど高校3年のときに地元愛知で万博があり、会場に設けられたボッチャのブースでは、デモンストレーションや来場者の競技体験が行われました。新聞社やテレビ局も会場の様子やボッチャのことを報道してくれました。デモンストレーターとしてそこに参加していた僕にとっては、ボッチャや社会での自分の役割について考えるいい機会でした。AO入試では、そうした経験を交えながら、大学で福祉を学びたいことや、障害者のために同じ立場から相談に応じる専門職に就きたいという目標をレポートにまとめ、面接を受けました。そして、なんとトップの成績で入学することができたんです。

大学入学を機に両親から離れ、一人暮らしも始めました。嬉しかったですね。ヘルパーさんや友人たちに助けてもらいながら、通学し、授業を受け、スーパーに買い物に行って、食事をする。飲み会やコンパにも行きました。居酒屋はバリアフリーじゃないですから、友だち何人かで運んでくれました。酔って車椅子ごと田んぼに落ちたこともあります（笑）。大学生活の経験、共に過ごした友人たちは僕の大切な宝物であり財産ですね。

失敗を恐れずチャレンジを、行動なくしては何も始まりません

大学4年生のとき、障害者の雇用枠のある企業約40社の就職試験を受けましたが、全て不採用でした。興味を持ってもらえても、会社側のバリアフリー化が進んでいないから、というところがほとんどでした。これから何をしようかと改めて考えるなかで、障害者の生活を支援するとともに、ボッチャを普及させ、将来はパラリンピックに出場できるような選手を愛知県から輩出したいと思うようになりました。そんなわけで卒業半年後にNPO法人「ホットスペース」を立ち上げ、2010年11月に活動をスタートしたんです。

障害者の支援事業としては、名古屋市を拠点に障害者宅へのヘルパー派遣を行っています。障害があるために学校に通えない、自由に暮らせない、一人暮らしができない。そんな悩みを持つ障害者のために、好きな時に好きなことができる日常をサポートしたいと考えています。

その一方で、ボッチャの普及と選手や審判の育成を目指しています。また、ボッチャを体験しながら障害者と地域住民のコミュニケーションを深められるように、月に1回の体験イベントを市内で開催しています。

ボッチャは年齢や性別、障害の有無に関係なく対戦できるユニバーサルなスポーツです。だから障害者と障害のない人とのコミュニケーションツールになりうると僕は考えているんです。重度障害者は社会経験をするチャンスがあまりありません。それは親御さんが過保護になり過ぎてしまうことも一つの原因かもしれません。でも、障害者にも皆さんと同じようにいろんな経験が必要なんです。ボッチャを通して人間関係を築き、社会参加につなげてもらえたら嬉しいですね。人は経験を通して成長するわけですから、失敗を恐れずにいろんなことにチャレンジしてほしい。行動なくしては何も始まりません。僕自身が重度障害者でもやれることを示すパイオニアになれたらいいなと思っています。

パラリンピックが終わったら、今年中に2冊目の著書を出すのが目標です。そしてさらなる目標は、結婚です。リオデジャネイロで開催される4年後のパラリンピックに子連れで行くのが夢なんです。僕はロマンチストなんですよ。今は意中の人がいないので、日本に戻ったら婚活しますよ（笑）。

＊このインタビューは6月24日に行いました。ロンドンパラリンピックでは、加藤さんはベルギー代表とのトーナメント初戦で先行しましたが逆転され、初戦突破はなりませんでした。敗退が決まり号泣したあと「リオを目指す」と力強く明言しました。「人生も重い障害でスタートし、ボッチャ人生もパラリンピックも負けから始まりました。やはり啓太は一歩一歩だな…と！」（お父様のコメント）。応援していきましょう。

かとう・けいた●1987年愛知県名古屋市生まれ。ロンドンパラリンピック・ボッチャ日本代表選手。名古屋CHALLENGER B.C.所属。2006年、高校3年生のとき、トップ選手の集まるジャパンカップで史上最年少優勝。その後08年まで3連覇。2012年ジャパンカップBC3クラス優勝。世界ランキング19位。生後3か月で原因不明の窒息が数分間続き、重度の脳性麻痺になった。両手以外はほとんど動かず、電動車椅子を使用し、五十音表を指してコミュニケーションをとる。日本福祉大学社会福祉学部卒。NPO法人ホットスペース理事長。名古屋市内の事務所兼自宅で、24時間ヘルパーの付き添いを受けながら一人暮らし。著書に『Go Forward! KEITA～重度障害者も大学生になれるんだ!～』（太陽書房）がある。

重度障害者でもやれることを示すパイオニアになれたらいいなと思います。

5名様にプレゼント

加藤啓太さんの著書『Go Forward! KEITA～重度障害者も大学生になれるんだ!～』を5名様にプレゼントいたします。ご希望の方は住所・氏名・年齢・電話番号・支部名を明記の上、本誌の感想やお便りを添えて下記までお送りください。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。なお、感想やお便りは「テルミーひろば」に掲載させていただく場合がありますのでご了承ください。

【宛先】〒213-0032
神奈川県川崎市高津区久地2-6-28
ザ・テルミー編集部
「巻頭インタビュー・プレゼント」係
【応募締切】平成24年11月5日必着